１人１台端末の活用による、日常生活の質を向上させる実践事例

学校名	岡山県立岡山聾学校	指導者名	池田　康弘
実践場面	自立活動	単元・題材名	自分のきこえについて
学習目標・ねらい	・自分と他者のきこえの違いや他者へのことばの伝わり方を知ることで自らの障害について理解する。(1-3,4　4-3,4)		
対象児童 生徒の実態	聴覚障害　　高等部　１年 ・準ずる教育課程　総合デザイン科の生徒 ・幼稚部から聾学校に通い、少人数の集団での活動が長いこともあり、社会経験が少なく、自分のきこえについて比較をしたことがない。		

活用の概要

・取組内容：前回の授業で理論的な説明（耳のしくみときこえ方、補装具の効果）を受けて、アプリを用いて、実際に自分と他者のきこえについて比較することで、障害の理解につなげる。

①　きこえの限界を知る

・アプリ：耳年齢チェック

・アプリの特徴：8000Hz 以上のモスキート音を出すことができる。（～17000Hz）

・実践の様子：補装具には限界（補聴器：3000Hz～8000Hz 程度，人工内耳：8000Hz 程度）があり、8000Hz 以上の高音が聞こえるか確認した。補聴器の装用者は全く聞こえず、人工内耳装用者は 8000Hz だけ聞こえた。

＜活用後の様子＞

生徒はきこえている音の高さの範囲が、自分が思っていたより狭かったことと、きこえていない様々な音があることを知った。そのような自分にきこえない音が生活していく上でどのような影響があるか、生徒同士で話し合った。

・「命にかかわること」があったときにはどうするか。

生徒一人一人が聞こえていない音を「デジタルX」のアプリを利用して、音を視覚化して確認した。多くの音がある中で、自動車の警笛や遮断機の警告音など危険を知らせる音が自分にきこえる範囲にあるか確認した。自分のきこえていない範囲内にも危険を知らせる音があることに気づき、他の人がいつもと違う行動をしている場合には、どうすればよいのか考え、意見をまとめた。このようなときには、「何かが起こっている」と想定して ICT による情報だけでなく、周囲の状況をよく見たり、臭いを嗅いだりして情報を収集することが大切であり、その情報を基に次の行動を考える必要があることを学んだ。

成果や活用のポイント ・ 課題、改善点等	成果や活用のポイント ・生まれつき聴覚障害のある生徒は自分のきこえについて深く追求したことがないことが多い。また、補装具を付けることできこえる人と同様に聞こえていると勘違いしていることも少なくない。ICT により自分が補装具の限界と限られたきこえの範囲で生活していることを理解することで、特に危険なときにどのようにすればよいのか、考えることができた。 課題・改善点 ・音に対する意識を中学部での自立活動と連携し、中学部在学時から体験を通して身に付け、自らの障害理解を深めておくことが課題である。 ・現在はスマートフォンをはじめとした ICT 機器が身近にある。それを利用したコミュニケーション方法を考え、実践できるようになることが課題である。（自立活動の内容 2-3　6-4)

（R5.11.30 提出）